

**新藤大臣、
内閣官房グローバル・スタートアップ
・キャンパス構想推進室
による海外調査の概要**

2023 年 11 月 14 日 (火) ~17 日 (金) : 米国 (サンフランシスコ)

2024 年 1 月 14 日 (日) ~20 日 (土) : 英国・スイス・イタリア

2024 年 4 月 28 日 (日) ~5 月 6 日 (月) : 英国・フランス・フィンランド

2024 年 5 月 14 日 (火) ~5 月 18 日 (土) : 米国 (ワシントン DC、ボストン)

目次

2023年11月14日（火）～17日（金）：米国（サンフランシスコ）	4
○ シリコンバレーで活躍する日系スタートアップ関係者との意見交換	4
○ 外村 スクラムベンチャーズアドバイザーとの面会	4
○ トレードシフト社 訪問	4
○ カゼローニ カリフォルニア州立大学バークレー校教授との面会	4
2024年1月14日（日）～20日（土）：英国・スイス・イタリア	5
○ ヒア・イースト 訪問	5
○ ホワイトシティ・イノベーションディストリクト 訪問	5
○ ベンチャーラボ社 訪問	6
○ エニイボティックス社 訪問	6
○ エノビア社 訪問	7
2024年4月28日（日）～5月6日（月）：英国・フランス・フィンランド	8
○ ケンブリッジ ジャッジビジネススクール関係者との意見交換	8
○ ケンブリッジ エンタープライズ関係者との意見交換	8
○ 英国ケンブリッジで活躍する日系スタートアップ関係者との意見交換	8
○ ブラッドフィールドセンター訪問	9
○ インペリアルカレッジ・カレッジ・ロンドン学長との面会	10
○ 英国ロンドンで活躍する日系スタートアップ関係者との意見交換	11
○ フランシス・クリック研究所訪問	11
○ エディンバラ・イノベーション関係者との意見交換	12
○ 英国エディンバラで活躍する日系企業との意見交換	13
○ パルムラン スイス経済・教育・研究大臣との面会	13
○ 欧州で活躍する日系スタートアップ関係者との意見交換	13
○ エンチャントッド・ツールズ訪問	14
○ ブラブラカー訪問	14

○ フランスで活躍する日系スタートアップ関係者との意見交換	15
○ Station F 訪問	15
○ パリ・サクレ地区訪問.....	16
○ Maria01 訪問.....	17
2024年5月14日（火）～5月18日（土）：米国（ワシントンDC、ボストン）	18
○ グズマン米国中小企業庁（SBA）長官との面会.....	18
○ コイズミ米国科学技術政策局（OSTP）副局長との面会.....	18
○ 米国ワシントンDCで活躍する日系スタートアップ関係者との意見交換.....	19
○ レスター マサチューセッツ工科大学（MIT）副プロボストとの面会	19
○ 米国ボストンで活躍する日系スタートアップ関係者との意見交換.....	20
○ エリオット ハーバード大学 副プロボストとの面会	20
○ CIC ケンブリッジ訪問	21
○ ラボセントラル訪問.....	22

2023年11月14日（火）～17日（金）：米国（サンフランシスコ）

○ シリコンバレーで活躍する日系スタートアップ関係者との意見交換

現地では活躍されている方々ならではの視点で、日本のスタートアップを盛り上げていくための率直な御意見をいただいた。新藤大臣からは、スタートアップ担当大臣として取り組む「グローバル・スタートアップ・キャンパス構想」について、世界の最前線で活動されている経験を踏まえ、運営の成果をあげるためにどのような方策と工夫が必要と考えるかと問いかけ、重要かつ率直な議論を行った。

○ 外村 スクラムベンチャーズアドバイザーとの面会

同氏は、新藤大臣が総務大臣時代に立ち上げた「異能ベーション」のプログラムアドバイザーとしても10年にわたって御尽力いただいた方。これまでにスタートアップを成功させてきた御経験を踏まえ、Food Techを含めたスタートアップの動向、日本のスタートアップが目指すべき方向性、スタートアップ政策への期待について、様々なアイデア・ご意見をいただいた。

○ トレードシフト社 訪問

同社は、電子インボイスなどのプラットフォームサービスを手掛ける企業。新藤大臣が3年前にデンマーク出張をした際に初めて訪問し、データドリブンな社会、DX実現の重要性を認識する1つのきっかけになった企業。今回は、この3年間の同社の取組・進化をお聞きするとともに、日本社会のDX実現について意見交換を行った。

○ カゼローニ カリフォルニア州立大学バークレー校教授との面会

アシストスーツの権威であり、同大学のロボット・ヒューマン・エンジニアリングラボのディレクターを務めるカゼローニ教授と意見交換を行った。同教授は、アシストスーツ関連のスタートアップを設立した経験を持つ起業家でもある。産業、医療、介護、災害対応など様々な分野で活用できるアシストスーツは、働く方々のQOL向上に資するだけでなく、人口減少が進む日本において生産性を向上させる成長戦略としても重要。

【英国】

○ ヒア・イースト 訪問

ロンドン東部オリンピックパークに立地するイノベーション・商業複合施設「ヒア・イースト（Here East）」を往訪した。そこで、スタートアップ支援を行う Plexal 社 CEO のアンドリュー・ローハン氏と意見交換を行った。

先方からは、

- ・ Here East は、政府が強い権限に基づき土地を収用し、開発会社に超長期のリース（999年）をして調達資金を回収。雇用増や経済効果につながっていること
- ・ Plexal 社はスタートアップ企業にきめ細かい支援を行っており、高い技術を事業化につなげることに成功。その取引企業には日本の企業も含まれていること
- ・ 一帯の運営を成功させるためには、優れたオーケストレーター（オーケストラの指揮者のような全体統括者。深い知識、尊敬の対象、無私の精神を持つ）の存在が不可欠であること
- ・ 入居者の多様性がイノベーション創出にとって重要であること

などの説明があった。

○ ホワイトシティ・イノベーションディストリクト 訪問

White City Innovation District を訪問し、イアン・ウォルムズリー インペリアル・カレッジ・ロンドン（ICL）学長らとも面会を行った。White City Innovation District には ICL のキャンパスほか、スタートアップのスケールアップのためのコミュニティ運営会社などが立地しており、ICL におけるスタートアップエコシステムの拠点となっている。

先方からは、

- ・ ICL はきめ細かいスタートアップ支援を行っていること（例えば、良い投資家の選び方の講義があること、スピアウトをより早めるためのガイドブックなど）
- ・ 研究者に対し、スタートアップが、研究以外の良い代替進路であるという教育を行うことで、起業者の層の厚みを生み出していること

- ・ 個々のスタートアップの失敗を全体としてカバーするためには、運営主体は一定以上の規模がないと、リスクの吸収が難しいこと
 - ・ 多様性が重要であり多くの留学生が多くいることは貴重であること
- などの説明があった。

【スイス】

○ ベンチャーラボ社 訪問

同社を訪問し、ビート・シリグ社長らとの面会を行った。ベンチャーラボ社は、起業家をサポートし、スタートアップの成長を支援する民間企業であり、スイスのスタートアップ支援の中心的存在である。

先方からは、

- ・ 大学の研究者は、いわばスタートアップの「原材料」であり、そういった人々にモチベーションを持ってもらい、訓練することで、起業家にするマインドセットを促すことが大事。研究者を、①探し、②育て、③研究室から外へと「蹴り出す (kick)」とともに、④彼らを世界の資金調達場につなげることが成功の秘訣であること
- ・ スタートアップランキング Top100 を決めるイベントを毎年行っており、これに選ばれることで、企業は信用を得られ、国際金融都市チューリッヒで資金調達が容易になるという利点があること
- ・ スタートアップは無料で支援講座の受講が可能であるが、選考は厳しいため、競争は激しいこと
- ・ 起業家が起業家を育てるという仕組みであること
- ・ スイス全土にわたって活動を行っており、年間 750 のイベントが開催されており世界中の投資家と何年もかけて密なネットワークを形成していること、

などの紹介があった。

○ エニイボティックス社 訪問

スイスのロボット分野のスタートアップ企業である同社を訪問し、フランク・ハウザー CEO らとの面会を行った。彼らの開発した4足歩行ロボット「ANYmal (エニマル)」の紹介とデモンストレーションを行った。先方からは、基礎研究から実用化まで 13 年を要したものの、その期間、出身校であるチュ

ーリッヒ工科大学（アインシュタインやレントゲンの母校）も出資者として加わり協働がうまくいったことが、成功の秘訣の一つであったとのこと。ロボット自身で階段を昇り降りでき、人間と同じ施設で活動できるところに特徴がありました。作業員にとって危険な場所（例えば石油・ガスプラントなど）での点検業務などに従事できるとのことであった。

【イタリア】

○ エノビア社 訪問

同社を訪問し、ヴィンチェンツォ・ルッシ CEO らとの面会を行った。ロボット開発に強みを持つイタリアのハイテク機器メーカーであり、自動配送ロボットなどの紹介を受けたほか、同建物内にオフィスを構える企業を視察した。

CEO らとの面会では、自動配送ロボットの他、インテリジェンスの技術を活用した自転車のブレーキシステムや、靴底が使用者によって調整されるスマートスニーカー、インフラ監視装置、自動配送ロボットなどの紹介を受け、その後、それらの製品やサービスが持つ社会課題の解決への可能性等について意見交換を行った。

【英国】

<ケンブリッジ>

○ ケンブリッジ ジャッジビジネススクール関係者との意見交換

○ ケンブリッジ エンタープライズ関係者との意見交換

世界有数の研究力を背景に、欧州最大規模のディープテック・スタートアップエコシステムの中心的な役割を担う、英国ケンブリッジ大学を訪問した。今回の訪問・意見交換を通じて、以下のような御意見をいただいた。

- ・ ケンブリッジ大学が提供するアクセラレーションプログラムにおいては、先輩起業家や企業の専門家がメンターと呼ばれる指導者の役割を務めていること。
- ・ メンターは基本的に無償であるが、メンターにとっても共同創業者や新しいビジネスの種にアクセスできる、謂わば、ウィンウィンの関係であること。
- ・ 運営資金の一部として、成功した先輩起業家などからの寄付も充てられていること（匿名の方の寄付により、バンクシーの作品が無償で5年間貸与されているとのこと）。
- ・ ケンブリッジのエコシステムは、海外に対してオープンであり、海外大学や企業とも既に様々なパートナーシップを結んでいること。

日本にスタートアップのムーブメントを起こすためには、国内外のスタートアップ拠点とネットワークを構築することが不可欠である。今回訪問した機関とは、現在検討を進めているグローバル・スタートアップ・キャンパス構想をはじめ、日本との連携の在り方について、引き続き議論を深めることとした。

○ 英国ケンブリッジで活躍する日系スタートアップ関係者との意見交換

英国ケンブリッジを中心に活躍するベンチャーキャピタル（VC）や起業家など、日系スタートアップ関係者との意見交換を行った。日英の比較ができる立場から、スタートアップエコシステムや起業文化、政府の支援の違い、さらには日本が学べることについて、以下のような御意見をいただいた。

- ・ 日本のVCとグローバルVCを比較した際、ハンズオン能力に差がある。起業経験を有するベンチャーキャピタリストは、米国では8～9

割、ヨーロッパでは5割、日本では1割という印象。このため、自らの起業経験を踏まえたメンタリングができない。起業家が増えれば、起業経験のあるVCの増加にもつながり、スタートアップエコシステムの好循環が生まれる。

- ・ 起業家を増やすためには、失敗に対するセーフティネットが重要。ヨーロッパでは個人保証を求めることはないため、失敗しても「負債」ではなく「経験」だけが残る。その結果、次のキャリアとしてVCなどの支援者側にまわることもできる。
- ・ 日本のスタートアップが小粒である理由は、良くも悪くも上場しやすいため。ヨーロッパでは上場に求められる基準が高いため、最初から高い市場性を伴う目標を設定するし、上場だけではなくM&Aという出口戦略も視野に、大企業も含めたスタートアップエコシステムが構築されている。
- ・ ヨーロッパでは、ディープテック分野に特化した官民ファンドが多く存在（例：EIT InnoEnergy, Future Fund, DTCF）。VCだけでは十分に対応しきれない、ディープテックスタートアップにとって不可欠な長期的な投資を受けることができる。補助金とは異なり投資であるため、用途の制限がない、ペーパーワークを求められないなど、スタートアップにとって使い勝手が良い。

英国ケンブリッジには、欧州最大規模のディープテック・スタートアップエコシステムが構築されている。現地で活躍されている方ならではの視点も踏まえつつ、日本のスタートアップを盛り上げていくための施策を検討していく。

○ ブラッドフィールドセンター訪問

英国ケンブリッジにおける中心的なスタートアップ拠点であるブラッドフィールドセンターを訪問した。今回の訪問・意見交換を通じて、以下のような御意見をいただいた。

- ・ ディープテック分野のスタートアップにとっては、創業初期の支援が重要であること。一方で、大学やインキュベーション施設の運営者が必要な支援をすべて提供しているわけではなく、民間のプレイヤー（VC、ベンチャービルダー）が補完的な役割を果たしていること。
- ・ こうした多様なプレイヤーによって構成されるエコシステムへのアクセ

スを求めて、他大学発のスタートアップや大企業もケンブリッジに拠点を置いていること。それが、更なる好循環を生み出していること。

<ロンドン>

○ インペリアルカレッジ・カレッジ・ロンドン学長との面会

英国ロンドンにおいて、インペリアル・カレッジ・ロンドン（ICL）ブラディ学長との意見交換を行った。ICLとは、本年1月の出張時にも意見交換をしているが、ICL側から「再度意見交換をしたい」との申し出をいただいたことから、今回の意見交換が実現した。意見交換の場では、ICLと日本の連携や、ICLの特徴について、以下のような御意見をいただいた。

<日本との連携>

- ・ 国際協力はICLにとって重要な評価指針の一つとなっている。
- ・ 日本とは、クリーンテック、メドテック、AIの分野で連携できると考えている。
- ・ 現在日本で検討を進めているグローバル・スタートアップ・キャンパス構想をはじめ、様々な形で連携したいと考えている。

<ICLの特徴>

- ・ ICLでは起業文化が醸成されており、卒業のための単位には加算されなくても起業家教育の授業を受講する学生が多い。
- ・ ICLが強みを有するバイオテック、メドテックの分野に注力したことで、1マイル圏内に450のスタートアップや製薬企業が集積するようなエコシステムを構築することができた。
- ・ ICLでは、インキュベーションだけではなく、スケールアップまでを可能とする機関を有している。
- ・ AIやクリーンテックのようなは政府の規制が絡む分野については、政策立案者にとってもスタートアップにとっても、互いの言語や考え方を理解することが重要。このため、人的交流を推進している。政策立案者のためのプログラムも提供している。

今回の意見交換を通じて、ICLとグローバル・スタートアップ・キャンパス構想の連携の在り方について、さらに議論を深めることに合意できたことは、と

でも大きな成果になったと考えている。引き続き、国内外の様々な取組とグローバル・スタートアップ・キャンパス構想を有機的に連携させ、ネットワークを構築していく。

○ 英国ロンドンで活躍する日系スタートアップ関係者との意見交換

英国ロンドンで活躍する日系スタートアップ5社との意見交換を行った。ロンドンは、スタートアップエコシステムランキングでシリコンバレーに次ぐ2位の評価を受ける都市である。こうした起業に適した環境づくりを学ぶ観点から、様々な現場の声をいただいた。意見交換では、各社が英国に事業展開した経緯、グローバルVCから資金調達する際の障害、現地スタッフの採用や教育、文化や働き方の違いなどについて、率直な御意見をいただいた。

○ フランス・クリック研究所訪問

英国ロンドン中心部に位置するフランス・クリック研究所を訪問し、意見交換を行った。同研究所は、欧州最大規模の生物医学研究所であり、研究成果を活用した豊富なスタートアップ創出実績を誇る。今回の訪問では、特に、研究成果を活用したスタートアップの創出、さらに、イノベーションに繋げる仕組みについて、議論を行った。先方からは、以下のような御意見をいただいた。

- ・ 研究成果を活用して創出されたスタートアップに対しては、資金的な困難に直面する創業初期段階の支援として、設立後2年間に限り、研究所の設備・機器を使用することを認めている。
- ・ 2年間という期限を設けることによって、VCからの資金調達を促し、自立するためのインセンティブになっている。
- ・ 研究マネジメントの工夫として、あえて分野や領域を特定せず、研究者の自由な発想に基づく研究提案を求めている。
- ・ さらに、イノベーションを創出する異分野融合の場として、研究者同士の偶然の出会いを誘発するような空間デザインにしている。
- ・ 世界的な研究者であっても終身的な雇用保障はせず、一定の年限を区切って、強制的に新陳代謝が起こる仕組みを導入している。
- ・ あくまでも土台は基礎研究であることが重要。最初から事業化を目的としてしまうと、短期間で成果が出るような研究ばかりになり、技術シーズの枯渇が懸念される。これは、日本の取組においても留意すべき点で

あると考える。

フランス・クリック研究所の研究マネジメントの在り方や、異分野融合を主導する空間デザインなどは、グローバル・スタートアップ・キャンパス構想を具体化する上でも検討すべき大きな課題。同研究所とは、研究マネジメント人材の育成、日英間の研究者の交流をはじめ、今後の連携の在り方について、引き続き議論を深めることとした。

<エディンバラ>

○ エディンバラ・イノベーション関係者との意見交換

英国エディンバラ大学の技術移転機関であるエディンバラ・イノベーションを訪問し、意見交換を行った。エディンバラ大学は、地方大学でありながら、豊富なスタートアップ創出実績を有している。今回の訪問では、特に、研究成果からスタートアップを創出する仕組み、エディンバラ・イノベーションの運営の特徴・工夫について議論を行い、先方からは以下のような御意見をいただいた。

- ・ エディンバラ・イノベーションは、エディンバラ大学が100%出資する民間組織であり、現場に権限が委譲されているため、自由度の高い運営が可能。
- ・ エディンバラ・イノベーションは、ディープテック分野のスタートアップ支援を重点的に実施。
- ・ ディープテック分野のスタートアップは、黒字化するまでの期間が長く、大規模な資金調達を要するため、相対的にリスクが高い。
- ・ 大学からの支援を背景に公的性質を持つエディンバラ・イノベーションは、創業初期のリスクの高い段階における資金供給や創業支援の面で果たす役割が大きい。
- ・ 創業後のスケールアップにおいては、VCやアクセラレータといった外部のプレイヤーに繋げるとともに、VCとの共同出資を主導することで、研究から商業化までの一貫通貫の支援を提供している。
- ・ エディンバラ大学発スタートアップのショーケースを開催することで、アメリカをはじめとするグローバルVCとのネットワークを構築している。
- ・ さらに、成長したスタートアップが新たなネットワークを提供するという好循環を生み出していること。

地方大学でありながら、海外とのネットワークを駆使して豊富なスタートアップ創出実績を誇るエディンバラ・イノベーションの取組は、日本におけるスタートアップエコシステム構築にとって大変参考になるものである。引き続き、エディンバラ大学を中心とするスタートアップエコシステムと日本の連携の在り方について、議論を深めることとした。

○ 英国エディンバラで活躍する日系企業との意見交換

英国エディンバラに拠点を置く日系企業との意見交換を行った。首都エディンバラが所在するスコットランドには、明治時代に日本の近代化に不可欠な西欧の先進技術や知識をもたらした御雇外国人の足跡が残されている。

現在もなお、ライフサイエンスや製造業をはじめとするディープテックの集積地となっており、スコットランド全体で59社以上の日系企業が進出している。意見交換では、現地スタッフの採用や教育、文化や働き方の違い、賃上げや電気代の高騰への英国政府の対応など、現場の声をお伺いした。

【フランス】

○ パルムラン スイス経済・教育・研究大臣との面会

イノベーションの重要性について意見交換を行い、グローバル・スタートアップ・キャンパス構想をはじめ、スタートアップ・エコシステムに関するスイスとの連携について、今後も議論を深めていくことを確認した。

○ 欧州で活躍する日系スタートアップ関係者との意見交換

欧州に拠点を置く日系ベンチャーキャピタル（VC）や気候変動対策に取り組むディープテック・スタートアップとの意見交換を行った。意見交換では、VCの資金調達の方法、投資先の探し方や投資価値の見極め方などについて話を伺った。また、気候変動対策に関してスタートアップ企業が持つ技術の新規性や有用性、技術開発にかかる資金の調達方法、抱えている課題などについても伺った。現場で活躍している方から、スタートアップに投資するVCの育成の在り方、ディープテック・スタートアップへの支援の在り方、気候変動という国際的な課題を解決するためのイノベーションの推進等について、様々なアイデアをいただいた。

○ エンチャントド・ツールズ訪問

ソーシャル・ロボットの開発を行っているスタートアップのエンチャントド・ツールズを訪問し、社会課題の解決に貢献するスタートアップの技術開発について意見交換を行い、以下のような御意見をいただいた。

- ・ 街中の一般的なオフィスビルの中でも、アイデアの浮かびやすい空間設計や騒音対策などの工夫により、優秀な技術者を引き付けプロトタイプの開発を実現していること
- ・ 人間社会の中で活動するロボットとして、人と共存しやすいデザインとコミュニケーション機能を重視していること。
- ・ 今回開発したロボットは、病院や介護施設等での利用を想定し、現場のニーズを踏まえて、ロボットに搭載する要素技術の取捨選択を行い、価格面も含めた最適化を図っていること。
- ・ これ以外にも、パンデミック発生時の人へのアクセスや、要素技術の組替えによる様々な状況への対応など、ソーシャル・ロボットは社会課題を解決できる大きな可能性を持っていること。

日本の重大な社会課題である少子高齢化や労働力不足に対し、指示どおりに動く／物を運搬する、といったロボットが活躍することを期待すると同時に、ロボットと一緒に生活する人々を幸せにするという同社の理念に共感したところ。引き続き、日本をはじめ世界のスタートアップの現状について理解を深め、その育成の在り方を検討することとした。

○ ブラブラカー訪問

ライドシェア（相乗り）プラットフォームを世界 21 か国に展開しているスタートアップのブラブラカーを訪問し、スタートアップのビジネスモデルとグローバル化について意見交換を行い、以下のような御意見をいただいた。

- ・ 空いている車の席と移動したい人とのマッチングにより、運転手と利用者の双方にメリットを与え、交通を最適化するプラットフォームを提供するというシンプルな発想に基づいていること。
- ・ 社員の半数が技術者で構成されるテックカンパニーであり、その収入には利用者からの手数料に加え、CO2 削減や渋滞緩和などの社会課題の解決に対する政府や自治体からの補助金も入っていること。
- ・ 家族や友人を車に乗せることと同じ扱いであることから、特別な免許や

本人確認を必要とせず、利用者による評価システムにより安全な移動手段の提供を実現していること。

- ・ 世界 21 か国で利用されるプラットフォームに至った重要なポイントは「コミュニティの構築」であり、類似のシステムより数多くの利用者をいち早く確保することが成功の秘訣であること。

日本の重大な社会課題である地方の過疎化とそれに伴う公共交通の撤退に対する解決策として、また、スタートアップのグローバル展開策としても、同社のビジネスモデルは大変参考になるものであり、引き続き、日本をはじめ世界のスタートアップの現状について理解を深め、日本が有力なスタートアップの世界的な拠点となるよう、ネットワークの構築に努めることとした。

○ フランスで活躍する日系スタートアップ関係者との意見交換

各社の専門分野における革新的な技術、立上げ初期の資金調達の方法、投資家の探し方やフランスにおける事業展開などについて話を伺った。日本発のスタートアップとして、グローバル化に向けた活動を展開している方々から、スタートアップへの支援の在り方、日本と欧州におけるスタートアップの環境の違い等について、様々な現場の声をいただいた。

○ Station F 訪問

フランス・パリのインキュベーション施設であるステーションFを訪問し、スタートアップを育成する拠点の在り方に関する意見交換を行った。今回の訪問・意見交換を通じて、以下のような御意見をいただいた。

- ・ インキュベーション施設の要となるのはエコシステムの構築であり、ステークホルダーの呼び込みやプログラムの更新など、起業家ファーストの精神でスタートアップにリアルタイムに必要な環境を提供していること。
- ・ ステーションFは、目利き・育成能力のあるベストなパートナーを選び、パートナーとして選ばれたマイクロソフトやメタなどの企業が入居するスタートアップの選定やプログラムの提供を行っていること。
- ・ ステーションFにはラボは無く、サクレ地区の研究拠点と連携していること。また、パートナーシップ、イベント、レストランの売上げの一部などを収入源として運営していること。

世界最大級のインキュベーション施設であるステーションFは、日本が検討を進めているグローバル・スタートアップ・キャンパスと同程度の延床面積であり、その施設・設備の設計や運営方法などを現地で実感したことが、今後のキャンパス構想の具体化に向けて大変参考になったところ。引き続き、世界有数のスタートアップ拠点の特徴について分析を行い、日本のグローバル・スタートアップ・キャンパスが世界最先端の拠点となるよう、議論を深めることとした。

○ パリ・サクレール地区訪問

フランス・パリ近郊の研究機関集積地であるパリ・サクレール地区を訪問し、研究からイノベーションに繋げる仕組みに関する意見交換を行った。今回の訪問・意見交換を通じて、以下のような御意見をいただいた。

- ・ パリ・サクレール地区は長期にわたるフランス政府の強いイニシアチブの下、科学技術・イノベーション拠点として開発され続けていること。
- ・ フランスの世界的競争力を高めるための「高度な技術を持った才能のプール」としてサクレール地区を位置付けていること。
- ・ 研究者に対し、ビジネスモデルを学ぶ機会を提供し、スタートアップの立上げを推進していること。
- ・ イノベーションスペースには、ワーキングスペースだけでなくラボも備え、単なる不動産業ではない、関係者と容易に会うことができる環境を整備していること。
- ・ イノベーション・エコシステムの構築には政府機関であるCEAが大きく関わっていること。

パリ・サクレール地区は、フランス政府主導で開発されてきた研究拠点であり、そこで生み出される成果をスピノフさせ、スタートアップによるビジネスとしていくエコシステムが構築されていた。政府によるプロジェクトであること、また、その高い研究力を生かしたディープテック志向であることなど、日本が検討を進めているグローバル・スタートアップ・キャンパスの具体化に向け、大変参考になる事例であった。引き続き、世界有数のイノベーション・エコシステムの特徴について分析を行い、日本のグローバル・スタートアップ・キャンパスが世界最先端の拠点となるよう、議論を深めることとした。

【フィンランド】

○ Maria01 訪問

首都ヘルシンキに所在する北欧最大のスタートアップ拠点である Maria01 を訪問した。フィンランドは、人口一人あたりの起業家数で世界一を誇り、Maria01 はその中で、主要なスタートアップ拠点として機能している。

今回の訪問では、Maria01 の特徴・工夫、日本との連携可能性等について意見交換を行い、先方からは以下のような御意見をいただいた。

- ・ 最大の強みはコミュニティ。起業家が、投資家や大企業に気軽にアクセスし、助け合える空間を提供していること。
- ・ (Maria01 の強みはコミュニティであるため) 日本との協力や連携については大歓迎であること。
- ・ サウナ、ジム、ヨガなど、スタートアップ個社では賄いきれない共通的な福利厚生を提供しており、また、サウナは起業家と投資家の偶然の出会いを誘発する装置であること。
- ・ 設立当初は行政の支援も受けていたが、2年程度で黒字化し、利益を再投資に回していること。
- ・ 株式の一部もヘルシンキ市が保有する公的性質を持つ組織だが、過剰な干渉はなく、特に運営面での制限もないこと。
- ・ 行政とは良い距離感であり、イベント出展時に外国の公的機関とのインターフェースになるなど、必要十分な支援をしてくれること。

Maria01 は、日本からの起業家派遣も受け入れるとともに、フィンランドのスタートアップを連れて日本のイベントにも出展している。Maria01 とは、相互交流のさらなる推進に向け、引き続き議論を深めることとした。

<ワシントンDC>

○ グズマン米国中小企業庁（SBA）長官との面会

イノベーションに寄与するスタートアップ支援政策について意見交換を行い、先方からは以下のような御意見をいただいた。

- ・ 中小企業の活発な活動が米国経済を強くレジリエントなものにしており、SBAは、イノベーションに寄与するスタートアップを支援する役割を果たしている。
- ・ SBAは、スタートアップと市場の間のギャップを埋め、エコシステムを助ける仕事をしている。特に、地域や、女性、恵まれない人、有色人種のコミュニティに関連するスタートアップに対して公平なアクセスを提供しようとしている。
- ・ 例えば、SBAは企業への何らかの支援を通じての信用を裏書きすることで市場へのシグナルを発し、投資家のリスクの低減しアクセラレーターを通して資金が提供できるようにするプログラムがある。
- ・ 中小企業革新研究（SBIR）プログラムに関連する調達では、政府の特定の課題について、中小企業に対して提案要求書や、情報要求書を求め、採択している。

○ コイズミ米国科学技術政策局（OSTP）副局長との面会

スタートアップ政策を含む科学技術・イノベーション政策について意見交換を行い、先方からは以下のような御意見をいただいた。

- ・ バイデン政権としては持続的に科学技術イノベーションを推進するとともに、それらを使って健康問題や気候危機と社会的課題の解決にどう対処するか取り組んでいる。大切なことは全ての国民が科学技術の恩恵を受けられるようにすること。
- ・ 幸い米国では一部地域においてスタートアップはうまくいっているが、このような機会を全米に拡大していくことが課題であること。
- ・ オバマ政権では米国のスタートアップの状況を調査して、MITなどの一部の大学において大学そのものが教授陣を支援し、出会いの場やマッチメイキング、特許専門家との橋渡しなどを行っていることが分かった。

た。それを全国に展開するためにNSFにI-Corpと呼ばれる制度を作り、スタートアップに対しての支援を行っている。

- ・ 米国でも日本の縦割りに似たような問題はあるが、各省庁に細分化された取組を統合化することが大切。そのために国家科学技術会議（NSTC）において取組の統合化を進めている。

○ 米国ワシントンDCで活躍する日系スタートアップ関係者との意見交換

日米双方のスタートアップの状況を知っている立場から、スタートアップ支援のあり方等について、以下のような御意見をいただいた。

- ・ 米国では小さな会社であっても技術さえあれば大きな投資が得られるが、日本ではリスクを取ろうとしない傾向。日本はスタートアップ立ち上げ時にもっと投資するべき。
- ・ スタートアップ支援に当たり、米国はほっておかれることが多いが、日本ではその将来を心配して口をはさむ人が多く、それがスタートアップの成長の足かせになっている場合がある。
- ・ 物事に成功するためには、right thing, right time, right place が重要であり、タイミングや場所は大事な要素。
- ・ 日本では投資が創業に結び付かず、単に個人への投資に終わってしまうことを好まない傾向があるが、投資を受けた個人がどのような社会的インパクトを与えたかが大事。個人、会社、コミュニティの3者が成長していくことが重要。
- ・ グローバル・スタートアップ・キャンパスでは、民間からもリスクマネーを呼び込み、最先端のマネジメントを行うべき。

<ボストン>

○ レスター マサチューセッツ工科大学（MIT）副プロボストとの面会

MITは、米国のリーディング大学の一つで、「世界で最もイノベーティブな1mile²」と呼ばれるスタートアップと投資の集積地であるケンダル・スクエアを構成する中核機関である。スタートアップ創出数は過去10年で900を超えており、日本が推進するグローバル・スタートアップ・キャンパス（GSC）構想のフィージビリティ・スタディに協力している。レスター副プロボストと意見交換を行い、以下のような御意見をいただいた。

- ・ MIT と日本のパートナーシップは歴史的に重要。MIT では、学生、教員ともに日本への関心が強い。
- ・ MIT には、基礎研究を社会的なインパクトのあるものとするため、様々な研究やイノベーション運営についての知見があり、日米双方に利益のある知の創出に取り組んでいきたい。
- ・ GSC 構想では、基盤的研究の成果が社会的なインパクトを与えることが期待される。GSC 構想には引き続き高い関心を有しており、今後とも連携に向けて議論を深めていきたい。

今回の会談を通じて、GSC 構想において、社会的なインパクトを与えたいという共通の目標を持つ海外大学との連携が重要であると改めて感じた。

○ 米国ボストンで活躍する日系スタートアップ関係者との意見交換

スタートアップエコシステムに必要とされる要素、VC のグローバル・ネットワークに入っていることの重要性や、大学発スタートアップに関する日米の違いとして、起業において失敗を許容するするマインドセット、VC が持つ専門性や目利き人材、若年の頃からの教育などについて、様々な現場の声をいただいた。

○ エリオット ハーバード大学 副プロボストとの面会

ハーバード大学は、米国最古の総合大学で、MIT と並びボストンエリアの「世界最大規模のバイオテック・クラスター」を構成している。エリオット副プロボストと意見交換を行い、以下のような御意見をいただいた。

- ・ 今回の訪問は、ハーバード大学と日本のパートナーシップを深める上で非常に良いタイミング。GSC 構想に対して高い関心を寄せている。
- ・ ハーバード大学では、新たな取り組みとして企業向けの研究拠点（ERC）を整備しており、GSC 構想との協力もあり得るのではないかと。
- ・ GSC 構想について、新たにハーバード大学との協力の可能性について協議を進めるためには、既存の日本とハーバードとの関係を活用することが考えられる。

○ CIC ケンブリッジ訪問

CIC の特徴・工夫、日本との連携可能性等について意見交換を行い、先方からは以下のような御意見をいただいた。

- ・ 「クラスター」と「ハブ」を重視している。クラスターは類似企業をグループ핑し、サプライチェーンのすべてを集約すること、ハブは、より広範囲に、個社内外での連携を推進すること。
- ・ 米国政府からみた CIC は「何かをつなぐ場所」。政府としてもワシントン DC 以外にハブを作るためのスマートな投資として考えていること。
- ・ CIC はインキュベーターではない。成功を真剣に目指している者にとって極めて重要な「時間」を削らぬよう、入居費はかかるが全てのことがスムーズに進むよう、配慮していること。
- ・ 起業を目指す者は仲間とお金欲しい。そのため、関係者と廊下ですれ違うような仕組みを取り入れ、鍵となるステークホルダーに偶然会えるようにしていること。
- ・ 同じライフサイエンス系でも、低分子ならボストン、細胞医療ならフィラデルフィアなど、場所に応じて得意な分野があり、その特性を考慮していること。
- ・ ラボとイノベーション拠点は、その距離が開くほどコラボレーションが減少するとの調査結果もあり、より近いところで、様々な関係者が入り混じることが効果的であること。
- ・ CIC にはフロア設計のためのデザインチームがあり、イノベーションを起こすことを目的に、デザイン上の工夫をしていること。
- ・ CIC はただのオフィスではない。コアはオフィス機能ではあるが、イベント、プラットフォーム、プログラム、ネットワーキングなどマルチな機能を設けていること。
- ・ CIC は「コミュニティを管理するビジネス」であること。

○ ラボセントラル訪問

ラボセントラルの特徴・工夫、日本との連携可能性等について意見交換を行い、先方からは以下のような御意見をいただいた。

- ・ 実験スペース以外に、コミュニティ形成、学習機会（プログラム）の設定など、運営面での工夫も取り入れ、ハード面よりもソフト面を重視していること。
- ・ 施設整備に対し、マサチューセッツ州政府の支援を受けたこと。
- ・ バイオ系のSUを立ち上げたい者に対し、実験スペースと様々なサービス（実験機器、所要の許認可等）を提供しており、これによって入居コストのみで起業までの時間を大幅に短縮していること。
- ・ ラボセントラルの利点は、①大手企業からのスポンサー収入により起業コストが下げられること、②起業・発展のためのガイダンスをSUの重要性を理解している大手企業が提供してくれること。
- ・ 日本におけるSU環境の課題は、金銭的な障壁と文化的な障壁。不安な起業家に対して失敗が許容されにくいいため、挑戦や失敗を祝うような、喜ぶような文化づくりが必要と考えられること。
- ・ VC業界を育成し、スタートアップエコシステムを形成するには時間がかかるため、辛抱強くやり続けることが必要とされること。
- ・ 設立時に巨額の費用を要するのはインフラ作りであり、政府などが施設を整備すれば、運営面は徐々に自立していけること。
- ・ 実験装置は、スポンサー企業の協力もあり、全てラボセントラル側で用意するため、入居SUは何も用意する必要がないこと。